「は」と「が」の指導法に関する実践報告

―本当は簡単なことと本当は難しいこと―

庵　功雄（一橋大学）

1. はじめに

「は」と「が」の使い分けは難しい。これは，日本語学習者（以下，学習者）だけでなく，日本語教師側にも見られる意識である。これに対して，発表者は庵（2018, 2020）などにおいてそうした見方は誤りであり，「は」と「が」の使い分けは実際は難しいものではないことを主張してきた。本発表では，発表者の授業実践における「は」と「が」の導入順序を説明し，使い分けは（適切に導入すれば）難しいものではないことを述べるとともに，真に難しいのは「は」であることを述べたいと思う。

2. 「は」と「が」に関する「誤解」

「は」と「が」の使い分けに関しては，次のような「誤解」が存在する。

（1）　a. 「は」と「が」の使い分けは難しい

　　b. 「は」と「が」の使い分けは韓国語話者以外には難しい

しかし，この 2 つはいずれも誤りであり，「は」と「が」の使い分けは，（練習に用いる）語彙の問題を除けば，初級終了レベルで十分に身につけられるものである。

3. 「は」と「が」の導入に必要なこと

「は」と「が」の適切な導入のためには一定の文法用語と概念を導入する必要がある。本節ではその点について述べる。

3-1. 主語

まず必要なのは「主語」である。ここが重要なところだが，第一段階では学校文法と同じく，「は」も「が」も主語，と捉えておくのがよい。つまり，この段階では，（2）（3）のような文のみを扱い，（4）のような文は扱わないということである。

（2）田中さんは大学生だ。

（3）あそこで女の子がピアノを弾いている。

（4）チョコレートは弟が食べた。

3-2. 節

次に必要なのは「節」である。学習者向けの節の定義として，（5）を採用する。

（5）述語が「～ば，～たら，～とき」などの形で終わる場合，その述語を含む部分を「節」と言い，節が 2 つある場合，通常の語順で前にある節を「従属節」と言う。

3-3. 2 種類の「が」

本実践では，可能な限り「意味」を持ち込まずに「は」と「が」の使い分けをルール化しているが，「が」については，2 つの種類を認める必要がある。

（6）雨が降っている。　　≠降っているのは雨だ。　　（中立的：中立叙述）

（7）私が会議に出席します。＝会議に出席するのは私だ。（強調：総記）

（6）の「が」は久野（1973）の「中立叙述」の用法であり，「A が B（だ）。」を「B（の）は A だ。」に置き換えられる。一方，（7）の「が」は久野の「総記」の用法であり，「A が B（だ）。」を「B（の）は A だ。」に置き換えられる。

第一段階では「中立的（中立叙述）」の場合のみが問題となるが，第二段階では「強調（総記）」の場合も問題になる。

4. 導入の順序

発表者は，「は」と「が」に関わる内容を 3 段階に分けて導入している。

第一段階は，「強調」を考えないものであり，ここでは，「文の主語」としての「は」と「節の主語」としての「が」の違いを理解することが重要である。

第二段階は，「強調」の「が」が現れる段階で，「A が B（だ）。」と「B（の）は A だ。」が等価になることを理解することが重要である。

第三段階は，「主題」の「は」が現れる段階で，この段階で初めて，「は」は「主題」を表し，「が」は「主語」を表すという説明を行うべきである [1]。

4-1. 第一段階

この段階については，庵（2020）で詳述したので，詳しくはそちらに譲るが，この段階では，動作，出来事，属性などの「主（ぬし）」を表す要素を「主語」とし，主語は「は」または「が」で表されるとしておく。授業実践における受講生の反応から，この定義は多くの母語話者にとって受け入れやすいものと思われる。

導入の順序としては，（8）（9）のような例で，（単文の場合の）「主語」が何かを学習者に確認してもらい，次に，（10）（11）のような例で，先の知見を「従属節だけの主語」に拡張させ，最後に，（12）（13）のような例で従属節の主語と主節の主語が同じ場合は単文の場合と同様になることを確認する [2]。

（8）田中さんは本を読んでいた。

（9）机の上にみかんがあった。

（10）田中さんが本を読んでいたとき（，玄関のベルが鳴った）。

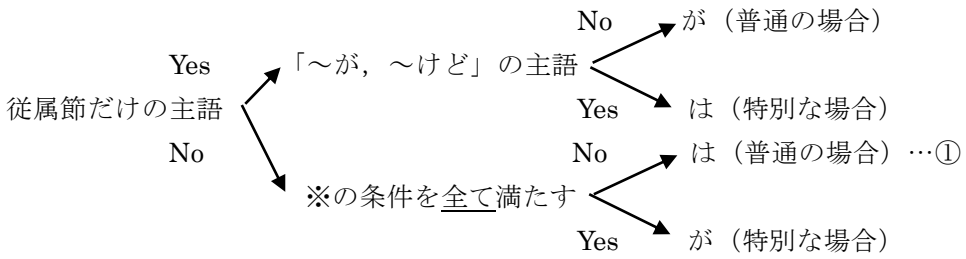
（11）机の上にみかんがあったので（，（私は）1 つ食べた。）

（12）田中さんは本を読むとき、よくお菓子を食べる。

（13）彼の息子は大学生なのに、あまり本を読まない。

ここで，この 3 つの場合は，「従属節だけの主語」がある場合とそれ以外に分かれることを確認する（「それ以外の場合」は「文の場合」に相当する）。

以上を踏まえて，次のフローチャートを導入する [3]。



※の条件：a）主語は「私」「あなた」ではない

b）述語は動詞で、否定形ではない

c）主語はその話に初めて出てきた名詞である

①の場合に「が」を使うと、「強調」の意味になる

図１　「は」と「が」の使い分け

この段階の習熟度を測るために，105 分×14 回コースの期末試験で，文章中の主語を虫食いにしてそこに「は」か「が」を入れる課題を出題した[4]。結果は次の通りである。

表１　「は」と「が」の正解率（%）

	は（正解数/解答数）	が	合計
文	88.9（31/45）	88.9（32/36）	88.9（88/99）
従属節	0	68.9（31/45）+	68.9（31/45）+
合計	88.9（31/45）	77.8（63/101）++	82.6（120/144）+++

表 1 では「従属節・が」の正解率がやや低いが，これは次の a，b が連体節内に収まることがわかりにくく，難度が高かったためと思われる（正解は共に「従属節・が」）[5]。

（14）例えば、コメがほしい漁師（a　）、取った魚を農家に持っていって、野菜と交換してもらうイメージです。しかし物々交換は、いつでもモノが手元にあって取引できるわけではなく、不便でした。そこで、みんな（b　）価値を認め、保存がきいて持ち運びしやすい貝やコメなどを使って取引するようになったと考えられています。

この結果はサンプル数が少ないなど問題もあるが，図 1 のような簡単なフローチャートで，韓国語話者以外でも約 90%の正解率が得られたことは重要であると言える。

4-2. 第二段階

次は，図 1 の①で「が」を使った場合である「強調（総記）」が含まれる段階である。図 1 の※の条件を全て満たすことが「中立的（中立叙述）」に「が」が使える条件なので，このうち 1 つでも満たさない場合に「が」を使うと，「強調（総記）」になる。例えば，（15）は a）を満たさないため「強調（総記）」になり，（15）と（16）は等価となる[6]。

（15）私がその会議に出席します。　　（A が B（だ）。）

（16）その会議に出席するのは私です。（B（の）は A だ。）

この段階では，既習である（17）のタイプの強調構文を用いて，（18b）のタイプの文で主語を強調できることと，それと等価である（18a）のタイプの文の「が」は「強調」を

表すことを説明する。

（17）田中さんはこの本を書いた。

→田中さんが書いたのはこの本です。

（18）a. 山田さんがテニス大会で優勝した。

→b. テニス大会で優勝したのは山田さんだ。

その上で，図１の※の条件を１つでも満たさない場合に「が」を使うと，（18a）と同じく，主語を強調する意味になることを説明し，練習する。「強調（総記）」が適切になるのは文脈によるため，第一段階のように形態・統語的には規定できないが，「母語で主語を強調しても不自然でない場合は，日本語でも，（15）（16）のいずれかを使って主語を強調してよい」(7) ことは言えるので，そのことを説明して練習する。

4-3. 第三段階

最後は，「は」が「主題」を表すことを導入する段階である。

第二段階までは，「主語」しか導入せず，「は」と「が」の違いは（基本的には）「節の主語」と「文の主語」の違いという形で導入してきた。これを言い換えると，第二段階までは，学校文法と同じく，「は」も「が」も主語としてきたわけである。しかし，「主語」を「（動作，出来事，属性などの）主（ぬし）」を表すものと規定すると，（17）の「田中さんは」は「主語」を表すが，（18）の「この本は」は「主語」を表さず，この文の「主語」は「田中さんが」であることがわかる (8)。

（19）田中さんはこの本を書いた。

主題＆主語

（20）この本は田中さんが書いた。

主題　　主語

第三段階では，（18）のような例を提示して，「は」が主語を表さないケースがあることを示す。その上で，「は」は「主題」を表すことを示す。「主題」というのは「～について言えば」を表すものである（三上 1963）。

次に，（21a）（21b）のように事実としては同じ内容を表している文であっても，文脈によって許容度に差が出ることを示し，関連する練習を行う。

（21）a. 太郎はここにあった牛乳を飲んだ。

b. ここにあった牛乳は太郎が飲んだ。

（22）Ａ：太郎は何をしたの？（文脈：「太郎」に関する話）

Ｂ1：○太郎はここにあった牛乳を飲んだんだよ。

Ｂ2：？ここにあった牛乳は太郎が飲んだんだよ。

（23）Ａ：ここにあった牛乳はどうしたの（文脈：「ここにあった牛乳」に関する話）

Ｂ1：？太郎はここにあった牛乳を飲んだんだよ。

Ｂ2：○ここにあった牛乳は太郎が飲んだんだよ。

続いて，（24）のような形容詞文や名詞文（「X は Y（だ）。」）は，X が Y という属性を持つことを表すことを導入する。

（24）この本はおもしろい。

その上で，（25a）と（25b）は内容が異なることと，日本語の形容詞文では一般に（25b）タイプ（「X は Y が Z」）が好まれ，（26）（27）の（　）内のタイプ（「X の Y は Z」）は使えないことが多いことを説明し，関連する練習を行う[9]。

（25）a. 象の鼻は長い。
　　b. 象は鼻が長い。

（26）田中さんは背が高い。（×田中さんの背は高い。）

（27）洋子さんは髪が長い。（？陽子さんの髪は長い。）

以上が,「は」と「が」に関連する文法項目の導入に関する発表者の授業実践の内容だが，この内容を大体 105 分×3 回の授業で導入して効果をあげている。

5. まとめ：本当は簡単なことと本当は難しいこと

本節では, 全体のまとめとして, 授業実践を通して発表者が感じているところを述べる。

「は」と「が」の使い分けに関しては，本当に難しいのは「は」であり，「は」と「が」の使い分けは本当は難しいものではない。それは,「は」と「が」の使い分けは，基本的には構造的なものであり,「節」か「文」か,「主語」は何か，という 2 点が理解できれば，適切に対応できるものであるからである。

一方,「は」が表す「主題」は完全に文脈的な概念であり,「今何について話されている／書かれているのか」を理解していないと適切に使えない。簡単な例で示すと，日本語では「太郎」が主題になっている場合,（28a）のように「太郎」を維持して受動文にするが，英語では,（29b）のように主語が切り替わるのが普通であろう。こうしたことからも,「主題」はディスコースレベルの概念として教師側が把握し，ボイス，テンス・アスペクトなども含めて指導していく必要があるものなのである[10]。

（28）太郎はいい奴だ。a）○（φは）みんなから愛されている[11]。
　　b）??みんなが（φを）愛している。

（29）Taro is a nice guy. a）? He is loved by everybody.
　　b） ok Everybody loves him.

注

(1)「は」と主題,「が」を主語と規定すること自体は正しい（Cf. Iori 2017）が，この段階で，学習者に「は」を”topic”,「が」を”subject”と示すのは時期尚早であると考える。なお，発表者は三上章の「主語廃止論」に基本的に賛同している（Cf. 庵 2003, 2012）が，本実践においては，学習者へのわかりやすさという点も考慮して,「が」は「主語」を表すものとする。

(2)（12）（13）のタイプの場合，主語を主節側に移動することができる。
（12’）本を読むとき、田中さんはよくお菓子を食べる。

(3) 図 1 の「普通の場合」「特別な場合」はそれぞれ無標，有標に当たる。「は」と「が」の使い分けと無標，有標の関係は庵（2016）などを参照。なお,「従属節」「文」それぞれの無標の場合を比べることで,「節の主語」は「が」,「文の主語」は「は」であることがわかる。

(4) 当該コースの受講生は一橋大学のプレイスメントテストで上級前半と判定された 9 名で，母語は中国語 5 名，ドイツ語 3 名，フランス語 1 名であった。課題文は「知りたいお金／上

（その 1）　物々交換から貨幣・紙幣へ」毎日小学生新聞 2022.7.6
（https://mainichi.jp/maisho/articles/20220706/kei/00s/00s/014000c）である。設問数は 16 で，総解答数は 16 問×9 名＝144 問となる。

(5)（14）の a, b を除いて集計すると，表 1 の「+」の値が「88.9%（32/36）」,「++」の値が「88.9%（56/63）」,「+++」の値が「88.9%（112/126）」となった。

(6) この点について詳しくは，三上（1953），野田（1996），西山（2003），Iori(2017)参照。

(7) 母語を使ったこの説明は，学習者の母語でも主語を何度も強調するのは不自然であるという内省が利くため，総記の「が」の過剰生成を防げるという点で有効である。

(8)「が」には主語を表さないものもあるが，これについては，第一段階に入る前に説明しておく。「主語を表さない「が」」については庵（2018）参照。

(9) 中国語では「X の Y は Z」に対応する文の方が「X は Y が Z」に対応する文より自然であることが多いため，こうした説明は必要かつ有効である。なお,「X は Y が Z」タイプの文と「X の Y は Z」タイプの文の関係については菊地（1990, 2010）を参照されたい。

(10) ディスコースにおける主題の問題を扱った基本文献に Givón(ed.)(1983)がある。

(11)「φ」はそこに有形の要素がないことを表す。

参考文献

(1) 庵功雄（2003）『『象は鼻が長い』入門―日本語学の父三上章』くろしお出版

(2) 庵功雄（2012）『新しい日本語学入門（第 2 版）』スリーエーネットワーク

(3) 庵功雄（2016）「「産出のための文法」から見た「は」と「が」」庵 功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版

(4) 庵功雄（2018）『一歩進んだ日本語文法の教え方 2』くろしお出版

(5) 庵功雄（2020）「「は」と「が」の使い分けを学習者に伝えるための試み―「主語」に基づくアプローチ―」『言語文化』57，一橋大学

(6) 菊地康人（1990）「「ＸのＹがＺ」に対応する「ＸはＹがＺ」文の成立条件」国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会編『文法と意味の間』くろしお出版

(7) 菊地康人（2010）「日本語を教えることで見えてくる日本語の文法」『日本語文法』10-2

(8) 久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

(9) 野田尚史（1996）『新日本語文法選書 1　「は」と「が」』くろしお出版

(10) 三上章（1953）『現代語法序説』くろしお出版から再版（1972）

(11) 三上章（1963）『日本語の論理』くろしお出版

(12) 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房

(13) Givón, Talmy(ed.)(1983) *Topic Continuity in Discourse*. John Benjamins Publishing Company.

(13) Iori, Isao(2017) “Brief Survey of Functional Differences between the “Topic” Marker *Wa* and the “Subject” Marker *Ga* in modern Japanese”, *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*. 58-1，一橋大学